



Title	プーシキンの民族性理解について : 十九世紀初頭ロシアのロマン主義文学を背景に
Author(s)	後藤, 正憲
Citation	年報人間科学. 1998, 19, p. 249-263
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4505
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

プーシキンの民族性理解について

——一九世紀初頭ロシアのロマン主義文学を背景に——

〈要旨〉

一九世紀初頭のロシアでは、ロマン主義的観点に基づく作品が、文学界の主流の位置を占めるようになっていた。それらは理性を絶対視するそれまでの古典主義的規範をうち破り、思考と感情の方向性を文学作品の中に表現していくことを特徴としていた。

当時、西欧の啓蒙思想やロマン主義文学の流入に伴い、それらの思想的影響を受けたロシアの知識人たちは、皇帝の専制政治や農奴制の下で苦しむ民衆に共感を覚え、文学的創作を通してそれらの社会システムに抵抗し、人間の自由の獲得を訴えた。

そうした状況の下で生みだされた彼らの作品には、彼らの、諸民族の独自性に大きな関心をおいた世界観が現れている。そこには、西欧から流入した思想が直接に影響を及ぼしたことでなく、ロシアの特殊な地勢学的、歴史的な要因も大きく作用したことも考えられる。

本論文では、ロシアにおけるロマン主義文学の立て役者となったプーシキンを中心に、当時の文壇における民族性の問題を巡る議論のもつ性質を

後藤 正憲

考察する。ここで示した民族性理解の内容をもつ作品は、その後時代が推移した後も文学的遺産として形を残し、民族性についての新たな解釈を与える原典となった。その意味でも、ここでの議論は、後のロシア、そしてソビエト連邦における中心と周辺の民族性理解にまつわる議論につなげて考えられるべき性質を持っている。

キーワード

プーシキン

ロシア

ロマン主義文学

民族性

デカプリスト

わがうわさはロシアの国原にあまねくつたわるであろう。

そのすべての民がおのがことばでわが名を呼ぶであろう。

ほこりたかきスラヴの子孫もフィンランドの民も、

いまは未開のツングースも荒野の友なるカルムイクも。^①

モスクワの中心を走るトベリスカヤ通りに面して、一九世紀の初頭にロシアで活躍した詩人プーシキンの銅像が建っている。それは、詩人の名を冠した広場の中央にあって、周囲のベンチは街行く人たちに待合わせや憩いの場を提供している。彫像の詩人は堂々と胸を張り、ややうつむき加減の顔は、もの思いに沈んでいるようだ。台座の正面には詩的才能を象徴する竖琴が形どっており、その側面に右の詩文が刻まれている。これは、プーシキンが、まるで自分の死を予言するかのようにその半年前（一八三六年）につくった伝説的な詩の一節である。

一八八〇年六月八日、銅像の除幕に向けたロシア文学愛好者協会の記念式典の席上で、ドストエフスキーはプーシキンを評して「他民族の精神を驚くべき深さにまで感じとり、その中に己が精神を姿を変えて映しだした」と述べた。^② 台座の詩からも分かるように、プーシキンはかなり細かいところまで諸民族の差異や特徴を認識し、それに深い関心を持っていた。一般に一九世紀の三〇年代頃までに活躍したロシアの文筆家たちは、個別の民族文化に大きな関心を寄せている。ヨーロッパの文化からアジアのイスラム世界やシブシートの生活まで幅広くテーマにして作品をつくったプーシキンを始め、カ

フカスやウクライナの諸民族に取材したデカプリスト（十二月党員）^③の作家たちがその例である。彼らは、ロマン主義的な詩や論文を通して、民族性の問題を盛んに議論し合った。

先に挙げた講演の中でドストエフスキーは、プーシキンの作品の中にはロシア人の民族性の精神的な力が顕れているとした上で、それはやがて最終的なところで全人類的な普遍性につながると続けている。彼が言うように、（プーシキンだけに限らず）当時の議論においては、民族の個性に関心が払われると共に、それを通して人間に普遍的なものが求められた。

文学界における主流が理性万能主義の啓蒙的古典主義からロマン主義へと移り変わって行った一九世紀初頭のこの時代は、ロシアにおける国民文学の形成期でもあり、そこでの議論の内容が後の思想活動に大きな影響を与えることとなった。その意味でも、そこで理解されていた概念の分析は重要な意味をもつものと考ええる。そこでは今日理解されているような意味合いとはかなり異なった形のその時間的・空間的におかれた状況に応じた形の理解が醸成されていたことがわかる。

まず、当時のロシア論壇における「民族」概念への関心が、何がかっかけとなって、どのように生じたかという、思想的な起点から見てみることにしたい。

思想的導入

このような、一九世紀初頭における個別の民族文化に対する文筆家たちの関心は、その思想的な根底にあるものとして、それに先立つ一八世紀末頃からのヨーロッパ啓蒙思想に負うところが大きい。^①

一八世紀にロシア語に訳されて出版された外国語の散文は、フランス語のものが最も多かったが、それは当時ロシアで文学の独占的消費者であった上流階級では、フランス語が必須の教養として做されていたことから頷ける。社交界では主にフランス語が使われ、ロシア語でうまく表現できない場合は日常でもフランス語が使われた。そのような中で、フランスの啓蒙主義思想は容易に入ってきて来やすい状況にあったと言える。特に一八世紀の半ば以降のフランスでは、全世界的に共通な人類の発展の歴史を概括的に捉えようとする啓蒙主義者たちの試み——ルソー、ディドロ、モンテスキュー、モレク、ボルテール、チュルゴー、コンドルセー等——が隆盛していた。ロシアにおいても、彼らの著作は翻訳・原文を通して浸透し、「高貴な野蛮人」等「自然のままの状態」の理想化（ルソー、ディドロ）、環境に適合した民族の多様性の理解（モンテスキュー）、文化と理性の成長の歴史（ボルテール）等の概念が、一八世紀末から一九世紀始めにかけてのロシアの思想界に大きな影響を与えた。

一方、当時ドイツでは「疾風怒濤」と呼ばれた文学・学術的潮流が隆盛しており、ロシアにおいても、ゲーテやシラー等の作品が好

んで読まれた。彼らの「世界文化」概念に向けた理想の追究という新たな芸術的取組みは、ロシアのロマン主義芸術の形成にも大きく作用した。中でも、その思想的潮流の旗手として活躍したヘルダーの業績は、ロシアの思想界において大きな意味を持っている。^②ヘルダー自身、二〇歳代前半の若き時代をロシア統治下のリガで過ごし、ロシアの多様な民族の編成や、その新たな政治的試みに少なからぬ関心を抱いている。更にベテルブルグでの講師の職への勧めがあったのを、ロシア人の独特な愛国心を職務上の見地から説くことはできないとして、断ったという逸話も残されている。

ヘルダーの著作は一八世紀末から一九世紀初めにかけて、ロシアでかなり盛んに読まれた。ロシア解放思想の父と言われるラジシチェフ（Radischev, A.H., 1749-1802）は、自分の著書の中で、ヘルダーが出版の自由に関してエカチェリーナ二世に宛てた啓蒙的要望書の中の一部を引用し、帝政下の厳しい検閲制度の撤廃を訴えている。また、デルジャヴィン（Derzhavin, G.R., 1743-1816）、カラムジン（Karamzin, N.M., 1766-1826）、シェーコフスキー（Zhukovsky, V.A., 1783-1852）といった、当時ロシア第一級の詩人や歴史家も、ヘルダーに注目し、その著作の一部を自ら翻訳したり、その思想を論文の形で発表したりしている。それら翻訳或いは原文を通じて、彼の思想が広く普及し、あらゆる民族文化の固有の価値が人間の歴史において単一の全体をつくりあげているというヘルダーの弁証法的な文化観が、当時ロシアの思想的潮流を根底から支えたとと言っても加言ではない。また、一般大衆の精神世界と民族

文化を一体化して捉える民衆主義（ポピュリズム）的な彼の思想は、後のヨーロッパ全盤におけるフォークロアへの関心を引き起こすきっかけともなった。

また、イギリスにおいては、いわゆる「オシアンの詩」の出現が大きな意味を持っている。これは一七六〇年に、J・マックファーソンが、伝説の詩人オシアン（Ossian）の詩をスコットランド高原において採集したものとして発表したものだが、後にそのほとんどが編者マックファーソンによる偽作であることが判明した。しかし、それにもかかわらず、ヘルダーによって民族的な創作の見本として評価され、ロシアのロマン主義詩人たちにも、民族的な詩に対する関心を呼び覚ますことになった。

その他に、一八世紀の半ば頃からロシアでは、シェークスピアの翻訳やその手法を真似た戯曲などが見られるようになり、その他W・スコット、シェリーといった作家の小説や詩も人気をさらった。しかし中でも、地中海やバルカン半島、トルコを遍歴する上で、個人の精神の解放や自由を希求する詩を生みだし、オスマン・トルコからのギリシア人の独立運動に自らの身を投げ出して死んだイギリスの詩人バイロンは、その反逆的な精神が当時ロシアの作家や思想家の間で大きな共感を得、プーシキンやレールモントフは彼を敬愛した。

これら西洋の文学・思想の流入は、それに伴って西洋が描写するところの東洋の姿をもロシアの文学愛好者に紹介することとなった。^⑥ バイロンやT・ムーア、ゲーテ、B・ユーゴー、ボルテール等

の東洋をモチーフとした詩、小説、戯曲などがそれである。また、この頃好んで読まれた本の中には、フランス人のアントワーヌ・ハミルトンの訳した「魔法のお話」（『千夜一夜物語』）なども含まれていた。

また、西洋式の組織的な東洋研究、いわゆるオリエンタリズムも、一九世紀の初めに西欧からの積極的な導入が試みられている。^⑦ まず、一八〇四年にはドイツから東洋学者のフレン（Frac.D., 1782-1851）が招かれ、その頃創設されたカザン大学で東洋語の専任教授に任命された。一八一一年には、フランスの有名なオリエンタリスト、シルヴェストル・ド・サシの下で学んだボルディレフ（Bodtrey, A.B., 1780-1842）が、モスクワ大学で東洋語を教え始めている。また、同年、当時ロシアで有力だった文芸誌「ヨーロッパ通報」に、ウィーンで西欧のオリエンタリズムに触れたウバロフ（Uvarov, S.S., 1786-1855）による、「ロシアにおけるアジア学アカデミー設立の講想」と題した論文が掲載された。その中で彼は、東洋研究の専門的機関を設けて、ロシアにもオリエンタリストの人員を確保しておくことの必要性を訴えている。^⑧ 結局この構想は実現しなかったが、その後一八一八年、ウバロフは帝国科学アカデミーの総長に任命され、同年、ペテルブルグにアジア博物館が、中央教育研究所には東洋語研究室がそれぞれ新たに開設された。

このように、当時ロシアにおいては、西欧で形づくられた東洋観の導入という傾向が伺える。それは、一方で文学作品や舞台芸術を通じた、サイドの言うところによる「通俗的なオリエンタリズム」

（東洋趣味）の側面をもち、他方において、公的機関に支えられた学術体系としての「職業的オリエンタリズム」の性質をもつものだった。どちらにおいても、西欧で形成された東洋観（オリエンタリズム）が、かなり直接的な形でロシアにも受け継がれた。

背景にあるもの

以上でおおまかに見てきたように、一八世紀後半から一九世紀初頭にかけてこのロシア文壇における民族文化に対する関心は、西欧の啓蒙思想、ロマン主義文学の影響を強く受けてのものだった。しかしプーシキンやレールモントフ、デカブリストの作家たちによる文学作品に触れると、民族文化との接し方において、たとえその精神的土壌が西欧に発見できるとは言え、明らかにそれとは異なった、独自の状況において形成された視点をもっていることが分かる。

この、ロシア文壇における民族観に、ある種の独自性を与える主要的な要因となったものとして、ロシアの西洋と東洋の間に位置する地政学的立場と、そこで展開された皇帝の専制政治と貴族知識人の抵抗勢力との間の葛藤のドラマを挙げることができる。次に、これらの背景的要因を、順を追って見てみることにしたい。

まず、一九世紀の初めに西洋と東洋とを結ぶロシアが体験した歴史的な出来事として、その双方との戦争があった。前者はナポレオン戦争、後者は露土戦争である。

ナポレオン率いるフランス軍が一八二二年ロシアに攻め入り、一

時はモスクワを占拠するが、兵力を温存したクトゥーゾフ將軍の率いるロシア軍がその後まき返し、逆にパリにまで攻め上った一連の戦いを、本国ロシアでは「祖国戦争」の名称で呼ぶ。このことから分かるように、この戦争はロシア人の愛国心を激しく高ぶらせるものだった。当時一三歳で、ペテルブルグ郊外の皇立寄宿学校で過ごしていたプーシキンも、後の作品の中でロシア軍の凱旋の模様を、情熱をこめて綴っている。

「忘れがたきひと時である！ 光栄と感激のひと時である！ 祖国という言葉が耳にすることに、ロシア人の胸はなんと激しく躍ったことであろう！」^⑨

この戦争には多くの文学者、詩人が参加している。当時、一般の兵士は農民や町の職人から徴兵して編成され、士官や将校は貴族から成っていた。貴族は、普通ある程度の教育を受け終わると、文官か士官の位を授けたが、それまで戦争と関わりのない生活をしていても、義勇軍に参加することは可能だった。こうして、特に愛国心の醸成していた貴族・知識人の間では、多くの者が我先にと従軍し、中にはナポレオン軍を追ってパリまで遠征した者もあった。そしてその多くが、自分の従軍した経験や、そのあふれる感情を詩や散文に表した。^⑩

ナポレオン軍との戦いは、ロシアにとって様々な意義があったが、その必須として、ロシア人に愛国心と並んで西欧に対峙する自己意識の高まりをもたらした。そこでは、もはやロシアはヨーロッパの後発国ではなく、逆にナポレオンの軔からの解放者の誉れに満たさ

れた国となった。そのような意識は、戦後十年ほどたった一八二三年に、パリでナポレオンの手記が出版された際、素早い反応となつて現れた。実際に部隊を率いて戦ったダヴィドフ (Davydov, D.V., 1784-1839) が、手記の中のロシア軍についての記述をつぶさに調べ上げた上で公表した論文が、当時ロシアでかなり反響を呼んだ。^①

一方、一八世紀の終わり頃から、ロシアはオスマン・トルコ帝国との戦いで優利に駒を進めていた。当時オスマン・トルコの治めていた広大な領土は、ロシアにとっては地中海への、イギリス・フランス・オーストリア等の西欧の列強国にとっては中東を越えてアジアへの入口として戦略的な要衝だった。そのような中、一八二一年にギリシア人を始めとするバルカン半島の諸民族によって、独立を要求する蜂起が起こる。

この時の、ギリシア人によるオスマン・トルコからの独立要求運動は、ロシアが新しくトルコから手に入れた土地で用意された。始めはオデッサで、ロシア在住のギリシア人商人らの手によって革命結社が生まれ、後にキシニョフ (モルダビアの首都)、キエフにまで広がった。軍事面では、ギリシア人でありながら親の代にロシアへ移住し、ロシア軍の将軍職を勤めていたイプシランチ (Ipsilanti <Ypsilantes>, A. 1792-1828) が結社を率い、彼の他にも実際にナポレオン軍との戦いにロシア軍の一員として参加したギリシア人将校たちが結社に加わっていた。

その頃、反政府的な詩を書いたために皇帝の命を受けて南ロシアに追放されていたプーシキンは、やはり南ロシアの地で革命を準備

していたデカブリストの詩人、思想家たちと共にキシニョフに居合わせ、ギリシア独立運動の闘士たちと深く交流している。

ギリシアの蜂起は、ロシアの詩人や知識人たちには重大な事件だった。少し後に友人に宛てたある手紙の中で、プーシキンはこの事件のことについて、「ヨーロッパにとってはその政治的な関係の諸諸の方が重要だったかもしれないが、ギリシア人のことほど民族的な〈narodno〉ことはなかった」と述べている。^②

ロシアの詩人たちはギリシア人の蜂起を積極的に支持した。「ヨーロッパ通報」にはギリシアの軍歌の翻訳が掲載され、プーシキンを始め、デカブリストの詩人たちは、バイロンがその身を捧げたギリシアの蜂起を、情熱的な詩で称えた。

結局、この時の独立闘争では、ギリシア人とモルドバ人、ワラキア人等の民族間の横の連係がうまくいかなかったこと、ロシアを始め、ヨーロッパ列強がお互いを牽制し合って支持に回らなかったことなどから、バルカン半島の諸民族の独立は実現しなかった。

しかしプーシキンの言葉にもあるように、ロシアの知識人にとってギリシア人の蜂起は、ギリシアの独立運動以上の意味合いがあった。本国ロシアで皇帝の圧制下にあり、自由への希求や民衆主義の思想に駆り立てられていた彼らにとって、政治・経済・文化のあらゆる面から照合した理想の国家像を描くことが最大のテーマだった。そうした中、古代ギリシア・ローマに人間の理想社会を見出した彼らは、ルネサンスに比する今日において、ホメロスの子孫たちの譲り受けるべきエラダー (ギリシアの古称、ヘラス) の地を「ト

ルコの重臣」から解放することに、民衆を皇帝の専横や農奴制から解放することを重ね合わせて見ていた。プーシキンが手紙の中で「民族的な」という言葉で表したのは、単に民族グループとしてのギリシア人がオスマン・トルコ帝国から独立することだけではなく、民族（民衆）〈narod〉が人間の理想的な社会を築くということを意味していたのである。

逆に言えば、プーシキン他ロシアの詩人たちは、人間の自由の獲得、理想の実現のための闘争という自分たちのテーマに、ギリシア人のトルコからの独立闘争を重ね合わせていた。おまけに今回は、ナポレオン軍との戦いの時のように実際に自分たちが参加して戦ったわけではないので、彼らの記述から敵であるトルコ人の姿は全く見えてこない。

しかし、ギリシアの独立運動が尾を引いて始まった露土戦争（一八二八年―一八二九年）には、一八二五年のロシアでの蜂起後前戦に左遷されたデカブリストの他に、プーシキン自身も自ら志願して、少しの期間ではあるが従軍している。カフカス地方を経てトルコに進軍していった時の模様を、彼は後に旅行記としてまとめている。

その中で彼は、道すがら自分の実際に目にした光景に、西欧で生み出された芸術や旅行記、また古典的書物の表現をあてはめ、比較しつつ歩を進めている。山の高みから飛沫をあげて流れ落ちる小川を見てはレンブラントの「ガニメデスの誘拐」の描写を思いだし、チフリス（現在グルジアの首都トビリシ）の浴場では、イギリスの作家T・ムーアによるグルジア人女性の描写に頷き、アルメニアで

は、不意に眼前に現れたアララト山に聖書のノアの箱舟の幻影を見ている。それらから、ヨーロッパ人が異郷の地アジアを見る視線が伺える。

しかしプーシキンは、ただそれら西欧人のアジア観をあてはめて見るだけではなく、それらの表現には極度に限定された情報しかないのを認めつつ、それを自分の観察によって訂正し、補っている。

「アジア的贅沢」という言葉はど無意味な言葉を知らない。この言い回しは、恐らく十字軍の遠征の際、己が城のむき出しになった壁や櫓のいすを後にした貧しい騎士が、初めて美しいソファアや色とりどりの絨毯、柄に宝石を散りばめた短剣を見た時に生まれたものだろう。今では、アジア的貧困、アジア的不潔などとは言えようが、贅沢は言うまでもなくヨーロッパのものである。」^⑧

実際、タタール人やトルコ人等の東洋人に対する見方にしても、傷ついた兵士や捕虜になったパシヤ、ペストに苦しむ街の住人たちとの交流を通じて、そこにより人間に普遍的な感情を見出している。ここでは、プーシキンの視点は「通俗的なオリエンタリズム」を越えて、実際の人々の息づかいに肉薄している。

以上に述べてきたように、一九世紀の初めに、ロシアは西と東に對するそれぞれの戦争を経験し、それを通じて自己と他者に対するパースペクティブを築いてきた。

一方、この時期はロシアがその版図を精力的に広げていた時でもあった。特にエカチェリーナ二世時代の一八世紀半ばから一九世紀初めにかけて、トルコとの戦争で得たカフカス地方やクリミア、或

いは東方に広がるシベリアの大地に、科学アカデミーから探検隊が派遣され、各地の自然―地理的環境やそこで暮らす諸民族の習慣・風俗等が克明に調査されていった。^⑮これらの探検隊にはロシア人の他にも、ロシアの科学アカデミーに所属するドイツ、フランス、北欧からの博物学者が多く参加しており、探検の記録もロシア語のみならず、多くの西欧の言語で出版されるという国際的な性質をもつものだった。彼ら探検隊の視点は、初めはラフィット(Lafiteau, P.)等の、後になってモンテスキューやルソー、百科全書派等の啓蒙思想に基づいており、各地で生活する民族をその環境と対応する形で類別し、比較するという手法をとった。このようなアカデミックな調査による情報で、当時の知識人階級に周辺の諸民族についての知識を供給する役割を果たしていた。^⑯

他方で、当時ロシアの版図の拡大は、皇帝政府をして新たに得た辺境の地を流刑地に定め、政治的反対勢力を中央に寄せつけないことを可能にした。実際プーシキンは反政府的な詩を書いた咎で追放され、一八二〇年から数年間、カフカス、クリミア、キシニョフ等の南ロシアを渡り歩いた。また後に彼の死を悼む詩の中で暗に政府を攻撃したレールモントフも、カフカスの地に追放されている。また、一八二五年十二月にデカブリストの蜂起が起こった時、絞首刑になった五人の首謀者を除く参加者は、シベリアやカフカスに追放された。

これらの詩人、思想家たちは、それぞれの流刑地で雄大な自然やそこで生活する人々と深く交わって生活することとなり、そこで得

た体験や情報を題材にして、多くの文学的な作品を残している。特に、シベリアに送られたデカブリストたちの中には、プリヤート、ヤクート、ツングース等のシベリアの先住民の生活に深く入り込み、彼らの生活様式や習慣、儀礼等、かなり詳細なエスノグラフィーを記録した者もあった。それらは書簡や論文の形で即座に中央の雑誌に発表され、読者に未知の土地での人々の暮らしぶりについて情報を提供した。^⑰

ところがカフカスは、トルコとの戦争に与った前線基地のような役割を果たしており、平和なシベリアとは状況を異にしていた。チフリスやウラジカフカスといった都市には、流刑者の身分で左遷されてきた者の他に、そこに駐屯する士官や兵士、外交や事務に携わる文官、保養客らによってコロニーが形成されており、現地でだけ発刊される雑誌なども出回っていた。このような状況の下では、現地の住民の生活に深く入りこんでの詳細な民族誌よりも、当時の祖国の運命や人間の理想についての主題に、現地のエスノグラフィーを織り混ぜた文学形式のものが生まれ安かったと言える。

民族性理解の特徴

これまでに述べてきたような、当時ロシアの知識人たちのおかれていた状況を考え合わせると、大筋で次のようなことが言える。彼らの、個別の民族文化に対する関心は、まずそこに理想状態を思い描いてそれを重視したことから発している。ギリシア人の独立運動

に対する彼らの反応が明示するように、ここでは古代のヘレニズム文明が享受していたような、自然と人間社会との完全な融和による全体性の回復が、民族文化の実現と結びつけて考えられた。すなわち彼らは、当時の社会的・制度的な弊害の生み出す閉塞感から脱けて、再び人間の本来的なあり方を取り戻すために、まずそれぞれに固有の民族文化の実現を条件に据えたのである。

更に、その起こった戦争や、政治的な理由による流刑等、当時のロシア知識人を見舞った運命は、彼らと彼らの言う諸「民族」との現実的な接触を可能にした。そこで、それまでのヨーロッパにおける啓蒙思想とロマン主義文学とに培われた観念的な民族概念に、実際のな見地から修正を加えることによって、独自の民族性理解の発展を見ることになる。

では、こういった経緯をたどっていったロシアの思想界において、民族、或は民族性といった概念は、どのように理解されていたのだろうか。次に、具体的な例としてプーシキンの作品を取りあげつつ、この理解形成の過程及びその特徴について、考察を加えてみたい。ここでプーシキンを取りあげるのは、彼の理解形成の過程が、当時ロシアの思想界全体の流れを、比較的よく映し出していると考ええるからである。

プーシキンは、皇帝の命を受けて南方に追放され、カフカス、クリミアを旅して回った上でキシニョフに赴いていた際、一八二〇年から翌年にかけて「コーカサスの捕虜」（コーカサスはカフカスのフランス語読み。ここでは日本語訳の通例に従う）を執筆した。こ

れは、彼の初期の作品で、一八二二年にはすでに初版されている。

この叙事詩は、古来の共同生活を営み、先祖の記憶に満たされたカフカスの山村に、半死半生のロシア人捕虜の運び込まれる場面から始まる。彼は虚偽や悪意の渦巻く近代社会に望みを失い、荒野を彷徨っていたところをチェルケス人の捕虜にとられて、この山村に連れて来られたのだ。この病んだロシア人は、チェルケス人の娘の手厚い世話のおかげで元氣を取り戻し、彼ら村人たちの生活を観察し始める。

この詩は、よくバイロンの影響が指摘されるのだが、終始ヨーロッパのロシア人と、彼によって観察されるアジアのチェルケス人との対比という構図に貫かれている。ここでは、自由を拘束され、失意に沈むロシア人に対して、雄壮な自然に溶け込むように生活するチェルケス人は、無法なまでの自由を享受し、普段は安逸の中にあるが、いざ戦いとなるとその不撓不屈の精神は残虐なまでの好戦性を見せる。

それに加えて、この詩ではチェルケス人の娘の存在も、ロシア人捕虜との関係において重要な役目を果たす。無垢な乙女の心に宿った初めての愛に對して、そうした初源性を失ってしまったロシア人の心は答えることができない。結局、ロシア人の愛を得られなかったことで生きる意味を失ってしまった娘は、夜半に自ら捕虜の鎖を解き、彼が村を脱け出すのを見届けてから川に身を投げる。チェルケス人の娘にとって、ロシア人との出会いは初めての愛の喜びを与えるものでありながら、同時に破滅へと導くものだった。ここに近

代化の抱え持つ矛盾と、当時ロシア帝国の統治下に入ってそれを体験したカフカスの山岳民族に対する、作者プーシキンの共感が映し出されている。

この作品の中では、チェルケス人の生活が人間社会の理想像として描かれている。家族的な共同生活、自由、素朴さ、処女性等、ヨーロッパの近代社会が失ってしまった「自然のままの状態」が、そこには息づいている。ここで、この作品はギリシア独立の希望に湧きたつ空気の中で書かれたことを想起すべきである。そこでは、古代ギリシア文明の象徴する自己完結的な世界が、人間らしさに満ちた本来あるべき姿として、チェルケス人の民族的な生活の中に具象化された。

この、理想的なものとしての民族性理解のあり方はいくつかの特徴が見られたが、まず第一に、その個別性に拠り所が見出された。

技法に関して、「コーカサスの捕虜」の中では、多分にフォークロアの要素が盛り込まれている。チェルケス人の服装、装身具（武器）、住居や食事等の生活様式から、民謡、鷹狩りや競馬がくり広げられるラマダンの祭りの様子など、かなり細かい描写がされている。またその中の物質的なものの名称の他に、地名、生物の名称、民族の呼称等、固有名詞を使った正確な限定性が見られる。これら民族誌的な記述や固有名詞の使用は、場の現実性を作品に付与する性質もあるが、そもそも作品の書かれた一九世紀初頭のロマン主義文学において、ものごとの独自性、個別性をもとにした博物学的な分類に関心が寄せられていたことの顕れでもある。実際、カフカス

の自然の描写に関して、プーシキン自身が読者の注意を呼びかけている脚注で、やはりカフカスの自然を詠みこんだ先達の詩人の作品を二つ紹介しているが、そのうちジェーコフスキーによる詩（一八一四年）^①には、カフカスに住まう八種類もの民族名が数え上げられている。

これらのことは、プーシキンが比較的初期の時代から、個別の民族性について少なからぬ関心を持っていたことを示している。前にも述べたように、全般的に、当時のロシアでは西欧の啓蒙主義やロマン主義文学の思想の流入によって、民族的に多様な文化の個別の価値について認識が高まり、一方で国の版図の拡大によって、その多民族性が意識された。また、戦地や流刑地での現地の人々との接触は、当時の知識人に民族文化の多様性について実際の裏付けを与え、それぞれの差異を確認せしめた。このことは、もとより民族的なものを理想的なものと做す雰囲気の中で、彼らが一層民族文化の個別性、それぞれの独自性を重視することにつながった。

そのような中で、ロシアの知識人たちは、西洋と東洋それぞれの個別の民族文化に深い関心を持っただけでなく、その間に位置するロシア人自身の民族性についても、活発な議論を行った。文壇においては、それまでの西欧追従的な文学・思想形成のあり方に対する苛立ちから、ロシアの歴史、ロシア語、正教の信仰などにロシアの独自性を見出し、それらを源泉にして国民文学を確立することの必要性が声高に叫ばれた。^②

この国民文学についての議論に対する反響として、第二の特徴的

な主張が生まれてきた。それは、民族に特有な性質というものは、その歴史や言葉にテーマをしぼらなくとも、思考や感情の習慣として自ずと文学作品に現れるものである、とするロマン主義的主張である。

プーシキンは、論文「文学における民族性について」（一八二五年）の中で、次のように述べている。

「気候、統治形態、信仰は、どの民族にも独自の相貌を与え、それは多かれ少なかれ、詩の鏡の中に映し出される。どんな民族にもそこにしかないような思考や感情の形があり、そこにしかないような習慣や迷信、癖が山ほどあるのだ。」^⑩

つまり、民族の独自性というのは、思维的にその要因を選ばなくとも、その欲するところに従って書けば、自ずと固有の詩となつて現れる。例えば彼は、シェークスピア、ラシーヌ、アリオスト等が、自国以外を舞台にした作品を多く産みだしたことを例にとつて、そこにもやはり「民族性」(narodnost)はあるのだ、としている。

ここで、「民族性」の決め手となるのは、具体的なものではなく、思考の方向性のようなもので、その場に生じた要求に応じて思想を向けておれば、自然な形で詩の中に浮かび上がってくるものである。そしてそのような状態で生じた個別的なものであって始めて、芸術の普遍性との弁証法的な関係を持つにあたり、意味を持った作品となる。ここでは「民族性」の思想的な特徴が指摘されているが、それぞれの独自性は環境に応じて自然に与えられるものとして捉えられている。

では、その「民族性」とは、具体的にどのような意味内容を持つのかというと、それはかなり曖昧で、西欧の国々との比較において言われる場合には「国民性」の意味に近い。しかしロシア国内の多民族性かなり明確に意識されていた当時、「国民性」の意味の表す領域が「民族性」の語の表す内容をすべてカバーしていたとは考えにくい。その他に少なくとも二つの意味を合わせ持っていたと考えられる。一つは人間の、いわゆるエスニックな意味での類別の基範となる「民族」(narod)の概念を指し、他方で農民や町の職人等、庶民の階級的な「民衆」(narod)の概念をも併せ持つ。この、民族性と民衆性の二重構造とでも言えるような仕組みが、当時の議論の第三の特徴として挙げられる。

このような仕組みは、今日の環境にあつては理解しにくいものだが、当時の階級間の溝の深さを考慮に入れると分かり易い。当時、文壇の知識人の悉くは貴族で、平民や農奴等の「民衆」は彼らと全く異なる生活様式をもっていた。フランス革命と啓蒙思想は貴族階級の民衆に対する意識を高め、またナポレオン軍との戦いは、共通の敵を前にした戦場において、平民出身の兵士と貴族将校の交流を可能にした。ところが、そこで貴族知識人の見出した「民衆」は、彼らにとって他民族と同様「他者」だったのである。

当時、デカブリストを中心に、貴族知識人の間に共有されていた民衆主義(ポピュリズム)的雰囲気は、それまで知られざる「他者」であった民衆の、農奴制の下で苦しむ姿を照らし出し、彼ら民衆こそ「歴史の担い手」であるとしてその解放を訴えた。^⑪

この「他者」である民衆の姿をよりよく映し出そうとする志向を如実に物語るのが、プーシキンの散文で書かれた作品「ゴリューヒノ村の歴史」(一八三〇年)^①である。作家志望だが題材に窮していた若い領主が、屋敷の中で偶然見つかった、歴代の領主によってつけられた過去の歴帳をひもとく。するとそこに、自分の領有するゴリューヒノ村の歴史について驚くべき事実が隠されており、それをもとに創作を進めていくという筋書きだ。

主人公は創作に入る前に、ロシアのある片田舎の小村ゴリューヒノ村の住民(領有農民)について、詳細な民族誌を提示する。そこでは「ゴリューヒノ人」の風俗や習慣、外見的特徴や文化に至るまで、統計的に明らかにされる。その次に主人公の創作が続き、村の歴史が展開される。まだ地主が豊かで、村の管理が寄り合いで選ばれた村長に任されていた頃、人々は家族的な共同生活を営み、平和な日々を過ごしていた。そこへある年、身を持ち崩した地主が最後の自分の領有地である村にやってきて、直接厳しい取り立てを行うようになってから、従来の共同体は消滅し、村は衰えていく。

前半の民族誌では、滑稽なまでの細部に渡って村の住民について記述されているが、後半の創作部に比べて、実際何も伝えるところがない。こうしてプーシキンは、当時文壇で流行っていた、思想よりもものに走りがちなエスノグラフィズムを、ユーモアをこめて風刺しているようである。

しかしこの作品で重要なのは、「コーカサスの捕虜」でチェルケス人の担った役割を、ここではロシアの一農村の領有農民が担って

いるということである。どちらも家族的な共同生活を営み、自然と共存する形で生活していたが、近代文明のもたらす惨禍に触れることにより、本来の姿を失って、滅びゆく運命にある。

ここで見方を換えれば、異なる民族性を持つチェルケス人も、異なる生活次元に生きる領有農民も、貴族知識人からしてみれば「他者」であり、それと同時に近代的な文明社会の失ったものを補って全体性を保つ体现者となっている。そこでは、人間の本来あるべき姿を文学の中で具象化するものとして、民族と民衆という二つの概念の間の垣根がとり払われている。つまり、民族性と民衆性という二つの意味合いが、「民族性」(narodnost)という語の表す領域において容易に入れ換わっており、その二つは分かち難く結びつき、溶け合っていたのである。

以上の論点をまとめると、次のようになる。一九世紀の初頭においてロシアの知識人の間では、民族性を理想的なものとする見方に起動力を得て、個別の民族文化に対する関心が高まっていた。そのような中で、当時彼らが社会的・政治的におかれていた状況に従って、独自の民族性理解が形成されていった。そこでは、個別の民族文化の独自性が強調され、それを体现する際には物質的なものよりも思想性が重視され、その媒体としては民族と民衆の二つの概念の間で越境性が見られた。

これらのことを鑑みるに、当時の「民族性」という概念は、むしろ「人間性」という語の意味に近い。そこでは個々の存在が独自性を持ち、その独自性が思想的な形で現れ、かつ民衆主義的であるこ

とが、人間の普遍的な価値を与えるものと見なされた。「民族性」を備えるとは、まさにこの人間に普遍的な価値に寄与する姿勢に他ならなかった。当時のロシアの作家や詩人たちは、実際に「他者」と間近に接することによって情報を得ながら、この普遍的な価値に資すべき「民族性」を、作品の中に表現していたのである。

脚注・引用文献

- (1) 「プーシキン詩集」金子幸彦訳、新星社、一九四八年、二九九頁。
- (2) Dostoievskii, F. M., *Sobranie sochinenii v desyati tomakh*, Moskva, 1958, Vol. 10, pp. 456-157
- (3) 一八二五年一二月に起こったクーデター未遂事件の参加者をいう。一二月を意味する「デカブリ」(dekabry) からきている。軍人の他、多くの思想家、作家、詩人が専制政治の打倒、農奴制廃止を訴えてこれに参加したが、時の皇帝ニコライ一世の軍隊によって簡単におさえられた。首謀者の五人は絞首刑に、残りの者の多くはシベリアやカフカス地方への流刑に処せられた。
- (4) ヨーロッパの啓蒙思想が当時ロシアに与えた影響については、以下の文献を参照。

Tokarev, C. A., *Istoki etnograficheskoi nauki*, Moskva, 1978, pp. 108-134; Begunov, Yu. K., 'Russko-evropeiskie literaturnye svyazi epokhi predromantizma', Na putyakh k romantizmu, Leningrad, 1984, pp. 237-277; Yusufov, R. F., *Russkii romantizm nachala XIX veka i natsional'nye kul'turi*, Moskva, 1970, pp. 66-81
- (5) ヘルダーとロシア文学との関連については、次の文献を参照。

Danilevsky, R. Yu., 'I. G. Gerder i sravnitel'noe izucheniye Literatur v Rossii', *Russkaya kul'tura XVIII veka i zapadnoevropeiskie literatury*, Leningrad, 1980, pp. 174-217
- (6) ロシアにおける「東洋をモチーフとした西欧の文学の受容」という点、Kaganovich, C., 'Romantizm i vostok', *Voprosy literatury*, 1979, No. 2, pp. 153-173 参照。
- (7) Lovikova, N. M., *Pushkin i vostok*, Moskva, 1974, pp. 6-8
- (8) Kaganovich, C., op. cit., p. 169
- (9) プーシキン「吹雪」(神西清訳『スウェーデンの女王・ベールキン物語』所収、一九八四年、岩波文庫、一三三頁)。
- (10) ナポレオン戦争と当時のロシアの思想界との関係についてについては次の文献を参照。Manuilov, V. A., *Otechestvennaya voyna 1812 goda v zhizni i tvorchestve Pushkina*, Leningrad, 1949
- (11) ビャーゼムスキーは「ナポレオンの手記の正確さを指摘し、それを偏りのない冷静な判断をもつて訂正を加えた」という「ダヴィッドフを評価した」。Vyazemskii, P. A., 'O razbore tpekh statei, pomeschennykh v zapiskakh Napoleona, napisanom Denisom Davydovym' (1825), *Polnoe sobranie sochinenii knyaza P. A. Vyazemskago*, St. Peterburg, 1878, vol. 1, pp. 193-197
- (12) Shapiro, O. B., *Osvobodzenie Gretsii i Rossiya*, Moskva, 1965, p. 108
- (13) Pushkin, A. C., *Puteshestvie v Arzum vo vremya pokhoda 1829 goda*, (1836), *Polnoe sobranie sochinenii*, Izdatel'stvo akademii nauk SSSR, 1938, Vol. 8, p. 477
- (14) 一八世紀から一九世紀にかけてのロシア領土内の探検隊についてはいくつかの文献を参照。Yusufov, R. F., op. cit., pp. 136-151; Lashuk, L. P., 'Problema stanovleniya russkoi etnograficheskoi nauki', *Istoriografiya etnograficheskogo izucheniya narodov*

SSSR, zarubezhnykh stran, Moskva, 1989, PP.9-26

- (15) 松前探検隊の中には「コロニン」(Golovnin, V. M., 1776-1831) のように、日本の近海にまで来ていた者もあった。彼は一八一一年に国後島で幕府の役人に捕らえられ、松前で数年間幽閉された後、釈放された。帰国後に、彼が日本人の風俗などを併記して綴った体験記は、注目を集め、ロシア語以外にもヨーロッパの数ヶ国語に翻訳され、間もなくそのオランダ語版が馬場佐十郎が日本語の重訳した。詳しくは以下を参照。Nakamura Yoshikazu, 'Pervye svedeniya o russkoi poezii u yaponitsev', in Zadornava, N., 'Pervye literaturnye kontakty' Voprasy literatury, 1975, No.7, PP.220-229.
- (16) デカブリストの民族誌的業績については、次の文献を参照。Gusev, V. E., 'Vklad dekabristov v otechestvennyu etnografiyu', Dekabristy i russkaya kul'tura, Leningrad, 1975, PP.80-104
- (17) Pushkin, A. C., Kavkazskii plennik, Polnoe sobranie sochinenii, vol.4, P.116
- (18) 例として「カークリベツメナル」ジョージムスキー等の議論があげられ、Kyukhei'beker, V. K., 'O napravlenii nashei poezii, osobennno liricheskoi, v poslednee deystvitetie' (1824), Sochineniya, Leningrad, 1989 PP.436-442; Vyazemskii, P. A., 'O Kavkazskom plennike, povest, soch. A. Pushkina' (1822), Polnoe sobranie sochinenii, St. Peterburg, 1878, Vol.7, PP.73-78
- (19) Pushkin, A. C., 'O narodnosti v literature' (1825-1826), Polnoe sobranie sochinenii, 1949, Vol.11, P.40
- (20) Gusev, B. E., op. cit., P.82
- (21) Pushkin, A. C. 'Istoriya sela goryulkina' (1830) Sochineniya v

PUSHKIN'S PERSPECTIVE ON NATIONAL TRAITS

— On the Background of Russian Romantic Literature

in the First Half of the 19th Century —

Masanori GOTHO

In the first half of the 19th century, while Western European philosophy of the Enlightenment and Romantic literature streamed into Russia, the Russian intelligentsia sympathized with the people who had suffered from tyranny of the czar and farm-slavery, and appealed through their literature for human liberty.

Reading the works of poets and critics of those days, we can notice that they were very interested in the originality of nations. Such an 'originality' spoke to the particular geopolitical and historical situation Russia found itself in, as well as Western European-formed ideas of Enlightenment and Romanticism.

In this paper, I will give careful consideration to the perspective of national traits which were discussed in detail in literary circles of the day, focusing especially on Pushkin. I will argue that 1) they had a general disposition toward national traits regarding both East and West; 2) they appealed to an 'ideal orientation' concerning national traits in literature, as opposed to material factors; 3) their understanding of national traits depended upon both ethnic and popular considerations.

As I will show, literary works, which spoke to national traits, were left as masterpieces of art, and remained even after things become turbulent. They have continued as original texts to be interpreted according to requirements of the times. The problems I will delineate in this paper should be considered in connection with the thereafter problems concerning nationality in Russia and in the Soviet Union.

Key Words

Pushkin
Russia
Romantic literature
national traits
Dekabrist